隊友会役職議員 年頭の挨拶 2019

米中対立新時代における日本の防衛

衆議院議員 隊友会顧問 中谷 元（防衛大24期 高知県出身）

隊友会の皆さま、明けましておめでとうございます。

平成最後の年となりました。

現在は急速に変化する時代であり、日本もすべての分野において各国と競争をしながら、国の安全保障を確保しつつ経済発展に努めています。

昨年末に、新しい防衛計画の大綱が決定し、我が国の安全保障を確保する新しい目標ができました。国防計画は、国を守る意志と能力を表すものであり、我が国に脅威が及ぶことを抑止するとともに、脅威が及ぶ場合は、計画に基づきこれを排除できなくてはいけません。「軍事の本質は優勝劣敗」であり、力がないと負け、力によって秩序ができるのが国際政治であります。

我が国周辺の安全保障環境は依然として厳しい状況が続いています。

朝鮮半島では南北会談や米朝交渉が行われており、CVID（完全で検証可能・不可逆的な核ミサイル等の廃棄）の実行が鍵となっていますが、その実現には紆余曲折が予想されます。日米での共同行動や日韓での防衛協力は大事な問題であり、常に連携と連絡の取れる状態にしておかねばなりません。

中国は、この30年間で国防費が約51倍となり、軍事力の近代化は著しいものがあり、南シナ海での海面埋め立てや海警を人民解放軍の統制におくなど、海上権益の拡大を続けるとともに、太平洋での活動も活発となっています。尖閣諸島の我が国領海への侵入や艦艇・航空機の対馬海峡の通過などが頻発しており、空自の緊急発進は1年間で500回を超えました。

ロシアとは、首脳会談で北方四島の帰属問題が話し合われ、平和条約締結に向け協議が進んでいます。

我が国としては、これらのことを念頭に、次世代に通用する実効性あるより積極的な防衛体制（アクティブ・ディフェンス）を目指すべきで、その柱は、第一に、多次元横断的防衛構想（クロス・ドメイン）、第二に、列島線防衛構想、第三に同盟・友好国との連携強化であり、これにより攻撃を阻止する能力（対処能力）を増強し、日米同盟全体の抑止力・対処力の一層の強化を図り、戦略環境を我が国に有利なものとするべきであります。そのため、予算を増額し、負担が増加の一途を辿る自衛隊任務の円滑な遂行を実現し、自衛隊の人的基盤及び防衛生産・技術基盤を維持・強化することが必要です。

本年も、自衛隊の精強性の強化のために、皆様方のご指導、ご鞭撻をお願い致します。

米中対立の狭間において

参議院議員 外務副大臣 隊友会相談役 佐藤 正久（防衛大27期 福島県出身）

「隊友会」の皆さん、新年明けましておめでとうございます。

昨年も皆様のご支援のおかげで、充実した国会活動を展開することが出来ました。ありがとうございました。

昨年は、米中の貿易摩擦により両国が関税を掛け合う事態となり、米中の対立が目立つようになりました。こうした関係は今後も続くのでしょうか。年頭にあたり、日本経済にも大きな影響を与える米中関係について考えてみたいと思います。

昨年10月に、アメリカのペンス副大統領は、トランプ政権の対中政策に関してハドソン研究所で演説を行いました。ペンス副大統領の対中国批判は、政治、経済、安全保障、人権など幅広い分野に及ぶ内容でした。この演説で米国政府が中国政府と対立姿勢を鮮明にしたことから、かつての米ソ間で繰り広げられた「冷戦」になぞらえて、新聞などでは「第2の鉄のカーテン」や「米中新冷戦」の始まりとも評されました。

また、米中間選挙が終わった11月9日には、米中両政府はワシントンで閣僚級対話を行いましたが、南シナ海問題、ウイグル自治区での人権問題、台湾を巡る問題で意見の隔たりが多く、対話は平行線をたどりました。

さらに、11月17日から18日にパプアニューギニアで行われたAPEC首脳会議では、「一帯一路」政策のもと経済と軍事の両面で太平洋島嶼部に進出する中国に対し、日・米・豪が経済・安全保障面で連携して「一帯一路」の代替策を打ち出しました。米国と中国は双方の通商政策を巡り、非難の応酬を繰り広げたため、首脳宣言の採択は93年以来、初めて断念されました。太平洋諸国を巡っても、地政学的なつばぜり合いが行われています。

こうした動向を見て参りますと、アメリカの与野党を問わず、対中強硬姿勢は非常に固いもので、中国の姿勢に変化が見られるまでは、簡単に軟化するものではなさそうです。また、宇宙やサイバー空間においても米中の対立は深まっています。

このような米中対立の狭間において、我が国の国益を守り抜くためには、経済、安全保障、宇宙、サイバー空間など様々な分野での対応が求められております。今年も引き続き国の安寧と国民の幸せのために、外務副大臣としての職責を果たして参る覚悟でございます。

末筆ながら、国際社会において日本が強いリーダーシップを発揮し、また防衛省・自衛隊が万全の態勢で任務に邁進できるよう、数少ない自衛隊出身の国会議員として、外交・安全保障政策の更なる推進に全身全霊で取り組んで参る所存です。引き続きのご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

今年1年が我が日本国にとりまして幸多き年となり、国民の皆様が昨年同様に安心して暮らせますよう、同時に、会員の皆様の御健勝と御多幸を御祈念申し上げ、新年の御挨拶とさせていただきます。

「真に戦える組織」の裏付けを

参議院議員 隊友会相談役 宇都 隆史（防衛大42期 鹿児島県出身）

隊友会会員の皆様、明けましておめでとうございます。航空自衛隊出身、「空翔ぶ参議院議員」こと宇都隆史です。昨年は公私に渡りご指導ご鞭撻を賜り、厚くお礼申し上げます。本年も倍旧のご指導ご鞭撻を賜りますよう、衷心よりお願い申し上げます。

さて昨年末には、第2次補正予算、及び来年度本予算が閣議決定されました。いずれも過去最高額の大型予算となり、安全保障基盤の強化に全力を傾注する安倍政権の姿勢が反映されたものと一定の評価をしています。一方で、新たな防衛大綱と中期防衛力整備計画については、総額が27兆4700億円程度とされ、果たしてこれで新たな領域の整備や、新規の装備品を維持し続けられるのかと疑問に思っています。更には、合理化や効率化を追求する諸施策を講じ、実質上25兆5000億円程度を目途とするとして、約2兆円の経費削減を求めていることには正直言葉を失いました。新たな領域への拡大によりますます、これまで以上に後方予算（特に維持整備費）が必要となるにもかかわらず、予算の伸びは事業の伸びに比例した必要額を確保してもらえず、装備品の稼働率を更に低下させるようなことがあれば、「真に戦える組織」とは正反対の結果を産むのではないかと非常に心配しています。通常国会冒頭に行われる第2次補正予算・本予算審議の過程の中でも、このような懸案事項に関して、政府に対し厳しい指摘を行い、政治的手当てを講じて参りたいと考えています。

「米中冷戦」と日本の進路

衆議院議員 隊友会相談役 中谷 真一（防衛大44期 山梨県出身）

明けましておめでとうございます。本年もどうぞ宜しくお願い致します。また、藤縄会長・先崎理事長はじめ隊友会の皆様には平素からご厚情を賜り厚く感謝致します。

さて、日本を取り巻く安全保障環境は風雲急を告げています。まさに「米中冷戦」が始まったと言えます。米中対立が激化しつつあり、私が「冷戦」と表現しているのは米ソ冷戦期にその構図が類似しているからです。

まず米ソ冷戦期は、米ソの経済圏は全く別でした。西側諸国、東側諸国と表現され資本主義経済国と共産主義経済国に別れ、その力の差も非常に大きなものであり、西側諸国が圧倒していました。その中で軍拡競争が行われました。ソ連は、これにより軍事に莫大な予算を使わされ経済的に破綻し崩壊に至り、米国が勝利しました。

現在、米国のトランプ大統領は、中国からの輸入品に対し関税の引き上げを行っております。習近平国家主席もそれに対抗し、中国に入る米製品に対し報復関税をかけています。昨年11月、アルゼンチンでのG20の際にトランプ大統領と習近平主席の会談が行われ一時休戦かとみられましたが、カナダ当局が米国の要請を受けて、中国通信機器大手、華為技術（ファーウェイ）CFOの孟晩舟氏を逮捕したことにより雲行きが怪しくなっています。今後は両国の経済的結び付きは弱くなっていくと思われます。さらに、今後両国による他国に対しての囲い込みが始まるのではないでしょうか。まさにかつての西、東の経済圏を作ることになるのではないでしょうか。また、トランプ大統領はINFを脱退し中距離核戦力の強化を宣言しました。これにより軍拡競争が起こることは必然であり、かつて冷戦期に行われたものと同じ現象を呈するのではないでしょうか。

この際、日本が取るべき進路はどうあるべきでしょうか。私は、かつて西側諸国がとった行動をとるべきと考えます。日本は米国との経済的結び付きを強化するとともにTPPなどによる強い結びつきの経済圏を作ることを主導すべきです。さらに東アジアにNATOのような多国間同盟を作ることを考えることも必要です。オーストラリア、ASEAN、インドなどとタッグを組み、その上で米国を引き込んで中心に据える。平和安全法制により整備した集団的自衛権による協力体制を築き、中国包囲網を形成し牽制することも必要ではないでしょうか。今後の5年間が日本の安全保障にとって非常に重要です。安全保障に深く携わったものとして国益を追求して参ります。

本年もご指導ご鞭撻賜りますよう宜しくお願い致します。

防衛省発令

制服高級幹部の異動

補職

陸上自衛隊

▽中病1歯科部長事務取扱を解く（中病副院長兼企画室長）陸将・鈴木智史▽3師団副師団長兼千僧駐司令（統幕副校長）陸将補・関口勝則▽1施団長兼古河駐司令（総隊司令部総務部長）陸将補・豊田真▽化校長兼大宮駐司令（北方装備部長）陸将補・竹内綱太郎▽九処長兼目達原駐司令（化校長兼大宮駐司令）陸将補・吉野俊二▽中病1歯科部長（中病2歯科部長）陸将補・津野田亮

海上自衛隊

▽空集団司令官（海幕人教部長）海将・園田直紀▽呉総監（空集団司令官）海将・杉本孝幸▽統幕防衛計画部副部長（4護衛隊群司令）海将補・福田達也▽統幕首席後方補給官（防衛装備庁プロジェクト管理総括官）海将補・阿部智▽統幕校副校長（練習艦隊司令官）海将補・泉博之▽海幕人教部長（海幕装備計画部長）海将補・柴田弘▽海幕装備計画部長（大監幕僚長）海将補・大力政富▽自艦隊幕僚長（横監幕僚長）海将補・二川達也▽3護隊群司令（海幕厚生課長）海将補・石巻義康▽4護隊群司令（海幕運用支援課長）海将補・西脇匡史▽横監幕僚長（統幕防衛計画部副部長）海将補・真殿知彦▽大監幕僚長（統幕首席後方補給官）海将補・近藤奈津枝▽練習艦隊司令官（3護隊群司令）海将補・梶元大介▽防衛装備庁プロジェクト管理総括官（海幕指揮通信課長）海将補・星直也

航空自衛隊

▽防医大幹事（岐病院長）空将・福島功二▽北空司令官（教育集団幕僚長）空将・森川龍介▽教育集団司令官（北空司令官）空将・城殿保▽7空団司令兼百里㊫司令（空幕防衛課長）空将補・佐川詳二▽教育集団幕僚長（2補処長兼岐阜㊫司令）空将補・平元和哉▽1術校長（総隊装備部長）空将補・樋山謙一郎▽2術校長（空幕厚生課長）空将補・倉本昌弘▽空医実司令（支援集団医務官）空将補・栗田成雄▽2補長兼岐阜㊫司令（1術校長）空将補・上境賢己▽岐阜病院長（空医実司令）空将補・森本浩吉

退職

陸上自衛隊

▽（第3師団副師団長兼千僧駐司令）陸将補・大内田憲治▽（第1施設団長兼古河駐屯地司令）陸将補・平栗浩一▽（九州補給処長兼目達原駐屯地司令）陸将補・山崎嘉樹

海上自衛隊

▽（呉地方総監）海将・池太郎▽（自衛艦隊司令部幕僚長）海将補・眞鍋浩司

航空自衛隊

▽（防衛医科大学校幹事）空将・山田憲彦▽（航空教育集団司令官）空将・**荒**木淳一▽（第7航空団司令兼百里基地司令）空将補・柏瀬静雄▽（第2術科学校長）空将補・山倉幸也

（平成30年12月20日付）

隊友会

UNMISS司令部 派遣要員を激励

隊友会は、国連南スーダン共和国ミッション（UNMISS）司令部要員として派遣される2名の陸自隊員を激励した。

12月19日防衛省へ出国の挨拶に訪れた陸上総隊司令部所属の宮本綾子3佐と中島大貴1尉に対し、隊友会本部事務局の植本事務局長が壮行を祈念して激励品を贈呈した。派遣要員の2名は、1月7日に出国し、派遣先で1年間、宮本3佐が兵站幕僚、中島1尉が航空幕僚として勤務する予定である。

我が国はUNMISSに対し、平成23年11月から司令部要員を、24年1月から施設部隊を派遣していたが、南スーダン共和国の国内情勢が安定に向けて政治プロセスが進展していたことから29年5月末に施設部隊を撤収した。しかし、司令部要員の派遣はその後も引き続き継続している。

隊友会

国際防衛ラグビー競技会を支援

今年9月から11月にかけて日本で行われるラグビーワールドカップに並行して、9月上旬から国際防衛ラグビー競技会が開催される。これは、防衛分野における協力・交流を目的として各国軍が参加するラグビー競技会で、2011年にオーストラリアとニュージーランドが共催した第1回、2015年に英国が主催した第2回に次ぐものであり、今年の3回目は日本の防衛省が主催する。

防衛省は内局人事教育局長を長とする準備委員会を立ち上げているが、昨年11月に準備状況を確認した。それによれば参加国はオーストラリア、カナダ、フィジー、フランス、ジョージア、韓国、ニュージーランド、パプアニューギニア、トンガ、日本の10カ国である。練習及び試合会場としては柏の葉公園総合競技場（柏市）、朝霞、松戸、習志野各駐屯地を予定している。

隊友会は自衛隊の代表チームに対して積極的な支援を予定しているが、具体的な支援内容については検討中である。

本決勝戦では、大会副会長である河野統合幕僚長が視察し、優勝チームに優勝旗を授与した。

第61回全自衛隊ラグビー大会

船岡駐屯地17連覇

12月10日、奥戸総合スポーツセンター運動公園において、隊友会が後援している第61回全自衛隊ラグビー大会の決勝戦が行われた。決勝には、Aブロックは、船岡駐屯地チームと習志野駐屯地チーム、Bブロックは松島・三沢・大湊基地チームと那覇・新田原・知念・鹿屋基地チーム、Cブロックは久居・高知駐屯地チームと厚木・横須賀基地チームが進出した。Aブロックは、習志野駐屯地チームの奮闘もあと1歩が届かず、29－28で船岡駐屯地チームが優勝、船岡駐屯地チームは本大会で17連覇を達成した。なお、Bブロックは那覇・新田原・知念・鹿屋基地チーム、Cブロックは厚木・横須賀基地チームが優勝した。

また、本大会のエキシビジョンマッチとして女子7人制の自衛隊代表チーム「PTS」が部外女子チーム「SDS」と対戦し、東京五輪に向けた女子ラグビーの成長を会場の応援者にアピールした。

Aブロック決勝モール
（左が船岡駐屯地チーム）